

史跡米子城跡歴史資料館

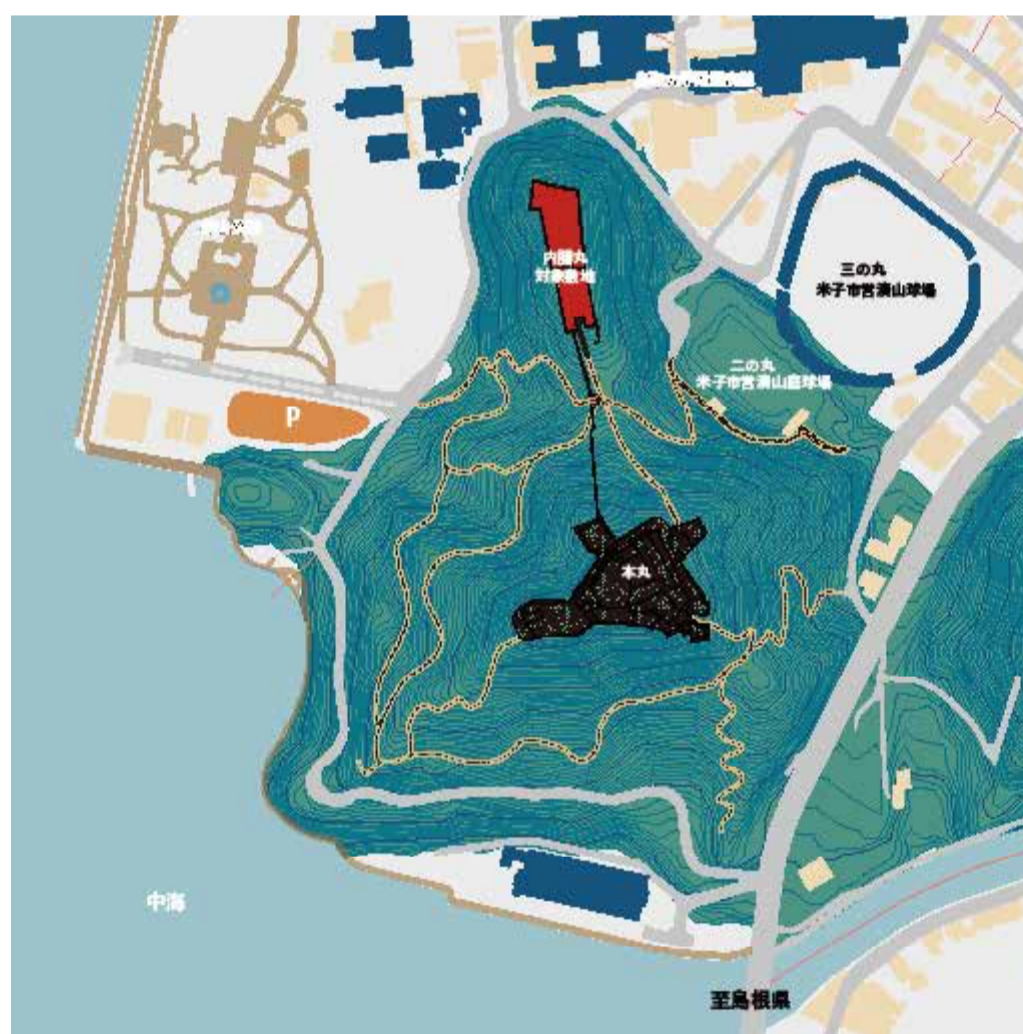
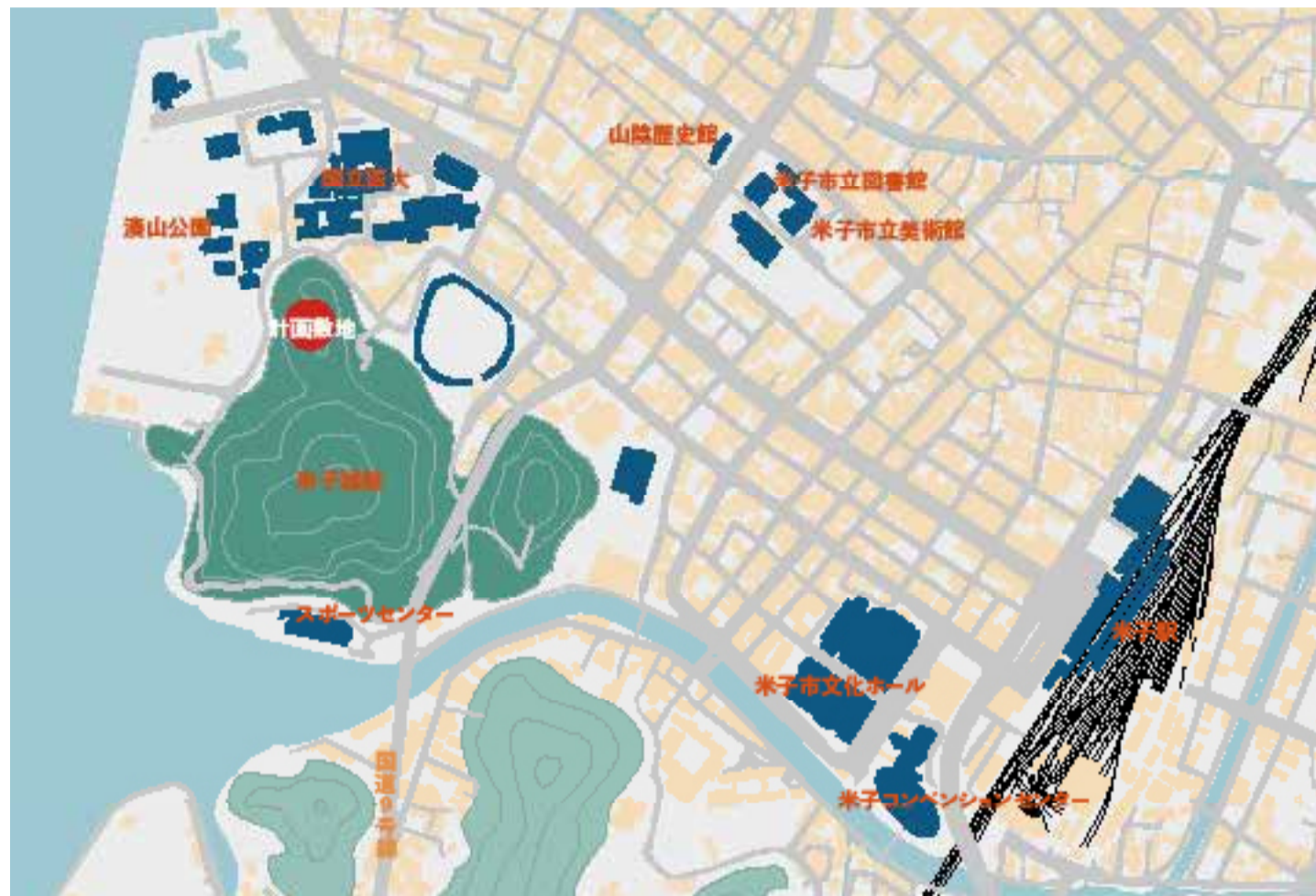
城と町をつなぐ歴史的空間の活用計画

中田和成
主査 前田英寿 副査 谷口大造

1 研究背景・目的

故郷米子市にはかつて中心地として栄えた米子城跡があった。今は天守は取り壊され石垣のみ残ったこの城跡は長い間市民のランドマークとして愛されていた。
鹿祭近年この城跡の管理が行き届いてなく、来訪者も減り、本来誇るべきはずのこの場所が蔑ろにされているのではないかと、何か建築で貢献できることはないかと考えた。
この史跡が市の観光資源として再び光を浴びるために、保存と活用、この二つの相互関係を基に改善していこうと思う。両者はどちらかが進めばもう一方につながる行為と考える。よってこの両方の機能を利用して史跡の価値を上げることを目的としている。

2 敷地調査



米子市は古くから交通の便もよく山陰の大坂と呼ばれ発展してきた。米子城跡市の中心地にあり、は駅からも近く、また車でも隣接する都市公園の駐車場からすぐの距離にあり、観光としてのアクセスは良い。
米子城跡を有する湊山には5つの登山道があり、うち市街地側二本が主に利用されている。頂上の本丸、中腹の内膳丸は特に手を加えられないまま残っているが、二の丸跡は現在テニスコートに、三の丸跡は野球場利用されてしまっている。

3 コンセプト



『城と町をつなぐ』

かつては城を中心とした町、米子、城と町は切ってもきれない関係にあった。しかし今はどうだろうか。かつての事はどこへ行ってしまったのだろうか。そこにあるだけで市民の意識の中で米子城跡というものはとても薄いものになっている。
今回は城と町の繋がりを、市民の城に対しての誇りを取り戻すため、三つの要素で繋ぐ。

視線

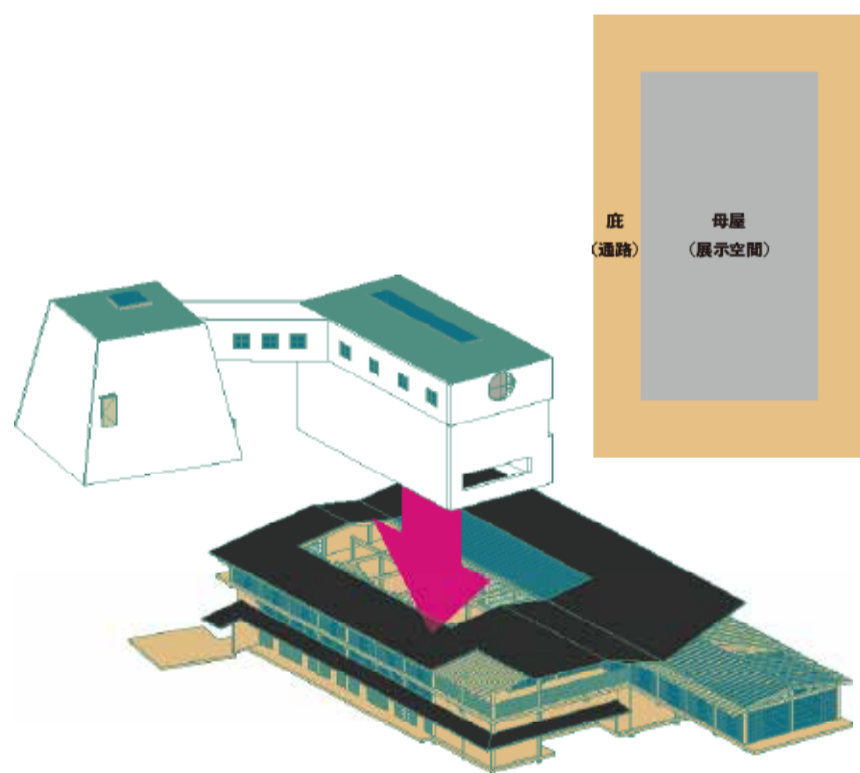
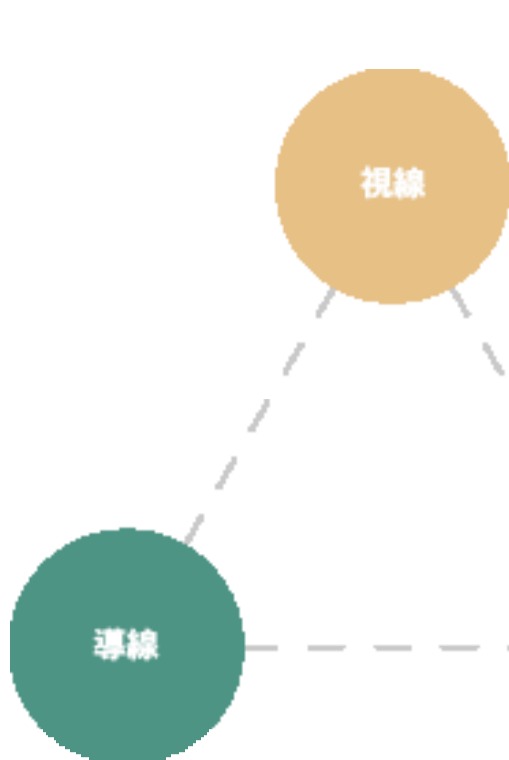
内膳丸の敷地は90mある城山のおよそ50mの地点に位置し、かつ町から近い。
内膳丸から見上げれば本丸の石垣が見え、見下ろせばかつての城下町が広がる。この場から二つの視線で城と町を繋ぐ。

導線

いくつかの登山道が設けられている城山。その中でメインの登山道について知ること、お二つを含む本道の結節点がある。内膳丸とずれた人たちの中間地点に位置する。建築に誘導したのち、山頂へと誘導することで導線をつなぐ。

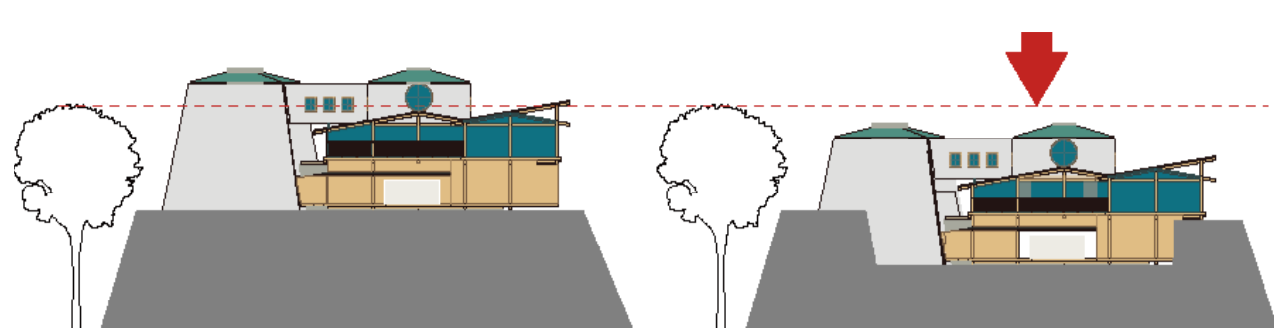
知識

ここに訪れることで、知識が増える。歴史的価値の高いこの史跡について知ること、お二つを含む本道の結節点がある。内膳丸とずれた人たちの中間地点に位置する。建築に誘導したのち、山頂へと誘導することで導線をつなぐ。

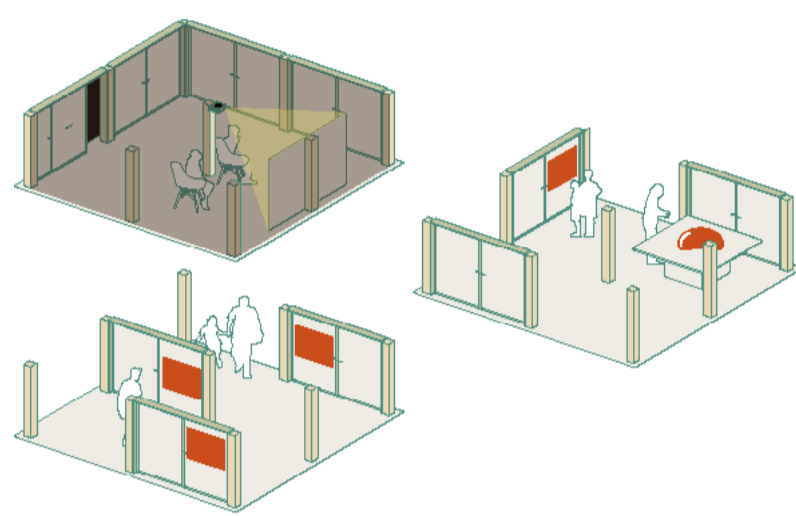
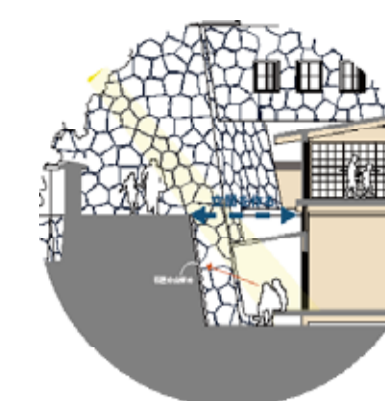


景観に沿うように木造と石垣の組み合わせで考えた。寝殿造のように母屋と久志先輩の空間構成をとり、石垣が貫入した部分を母屋、その周りに他の機能を与えた。

4 設計



3フロア構成で地下1階から入る仕組みになっている。1フロア分を地下に沈めることで建築自体が目立たないものとし、周囲の木々に紛れるようにした。
地下を掘るにあたって山留めは石垣とし、外側の石垣の崩落を防ぐ。
山留めに距離を持たせることで光を取り込む縁側として利用した。

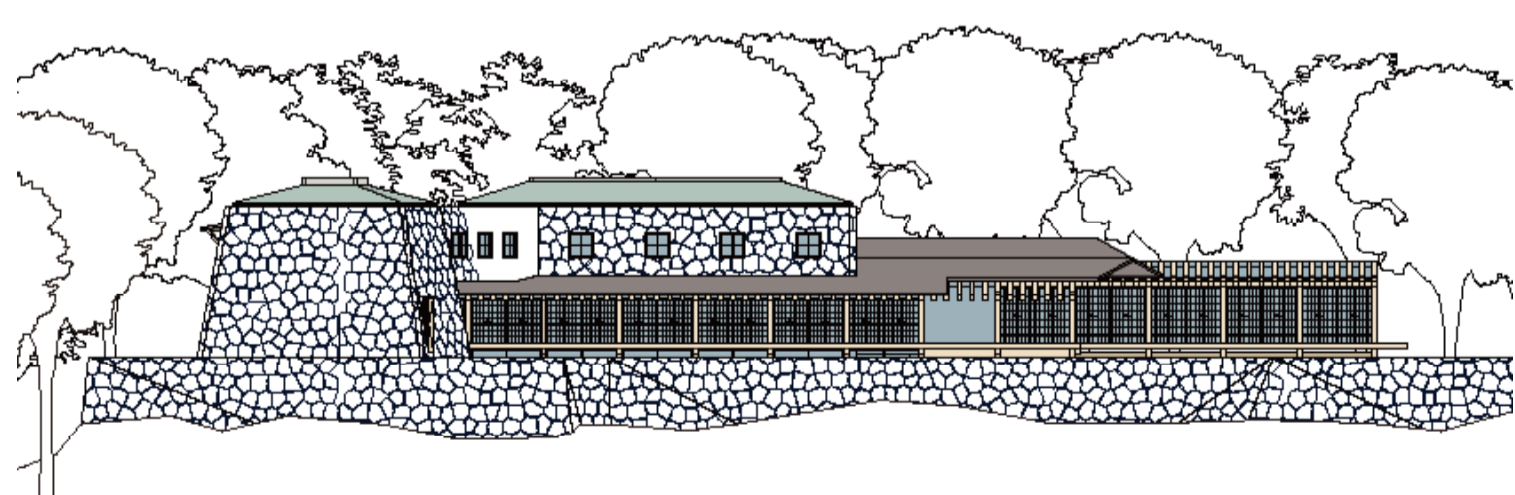
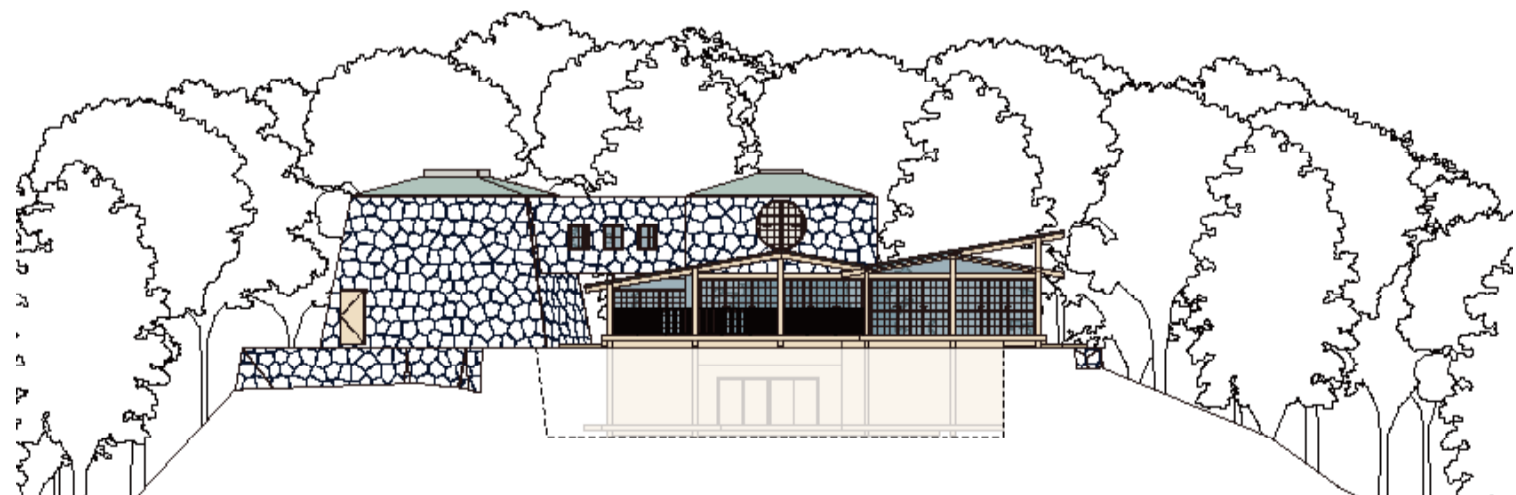


大枠の歴史はもろんだが、研究所を併設したことにより、研究や発掘調査の結果を発信していくこともメインにしている。そのため、次々に代わる展示空間に対応するように伏すまでの間仕切りを採用した。獨特の取り外しが自由な利点を生かして様々な空間を作ることができる。

フロアマップ



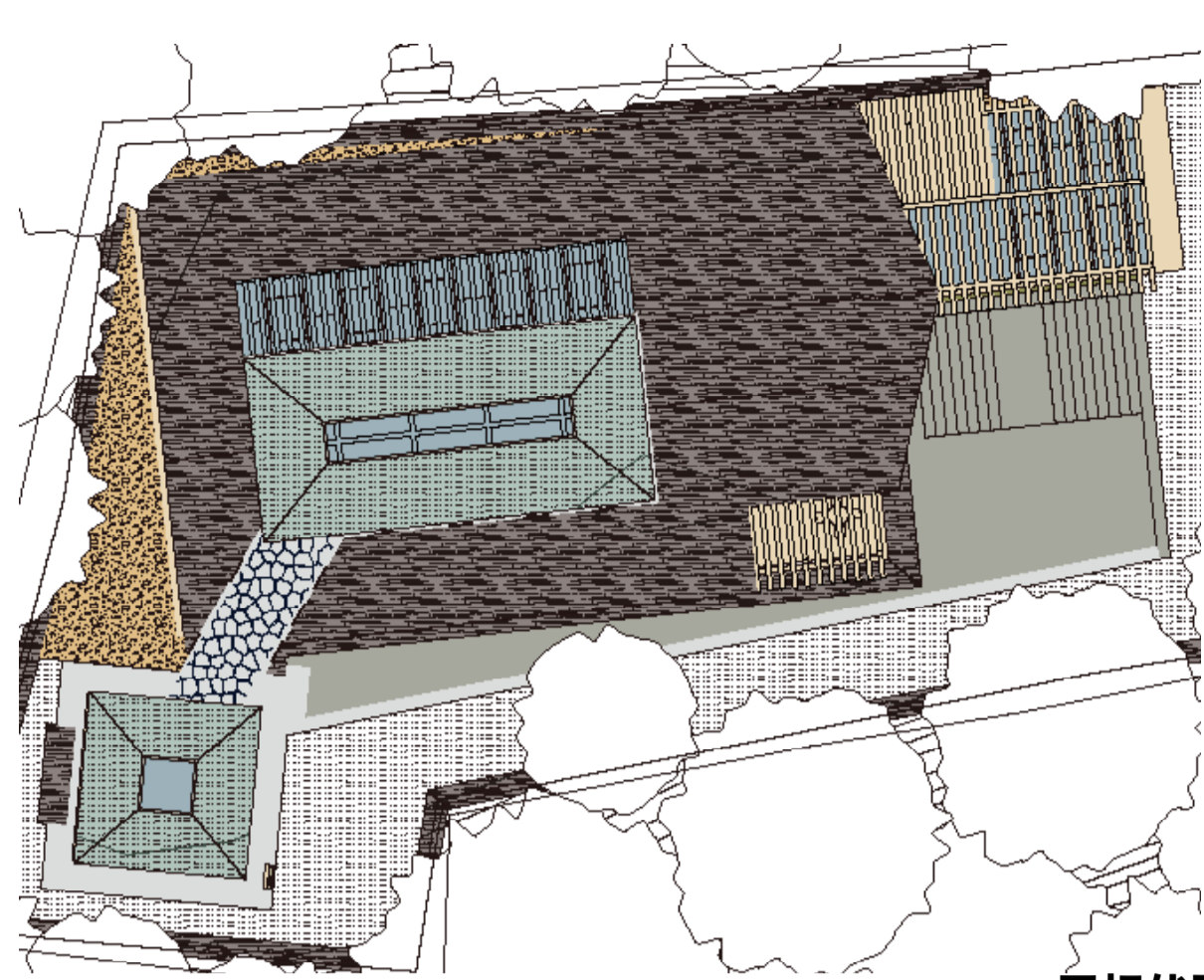
立面図 (1/300)



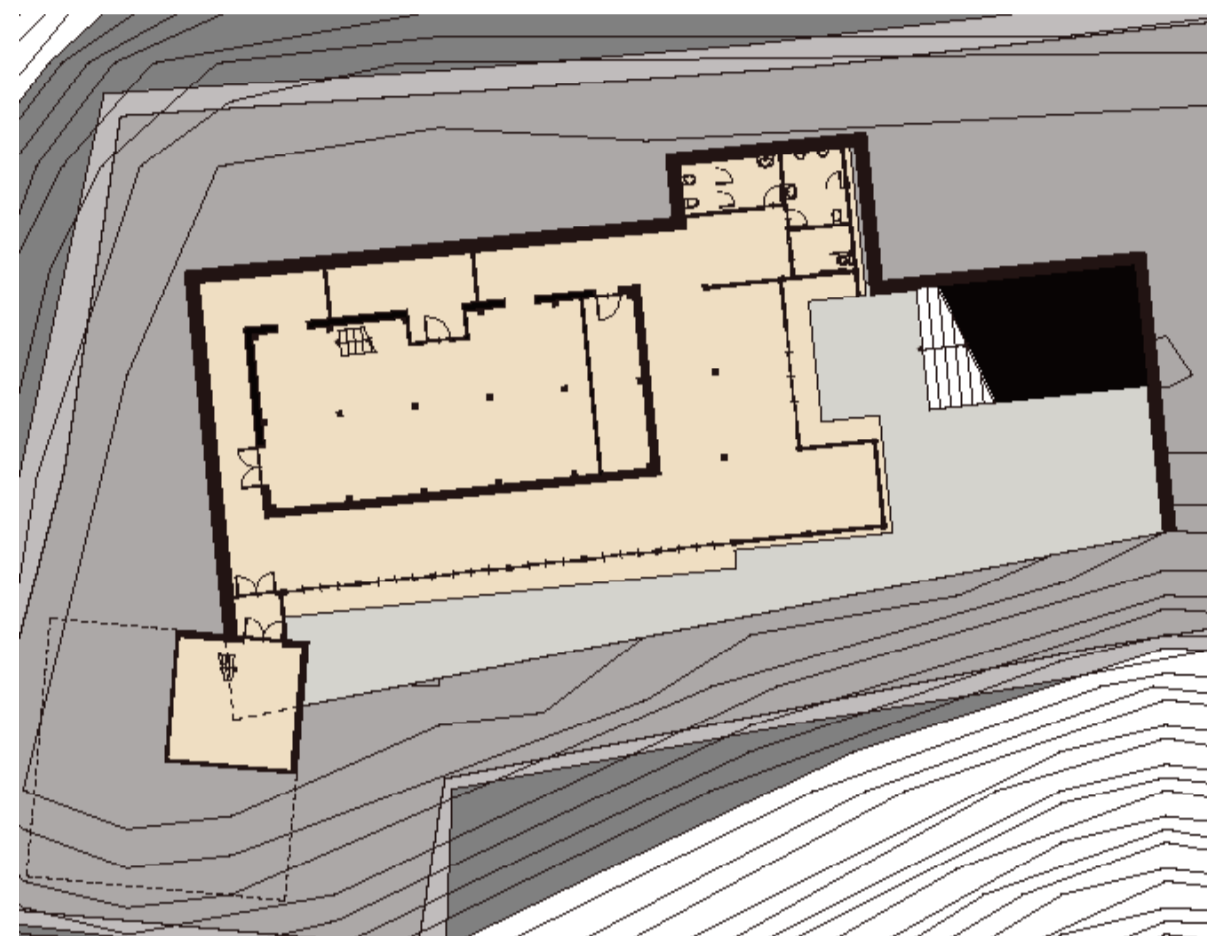
断面図 (1/300)



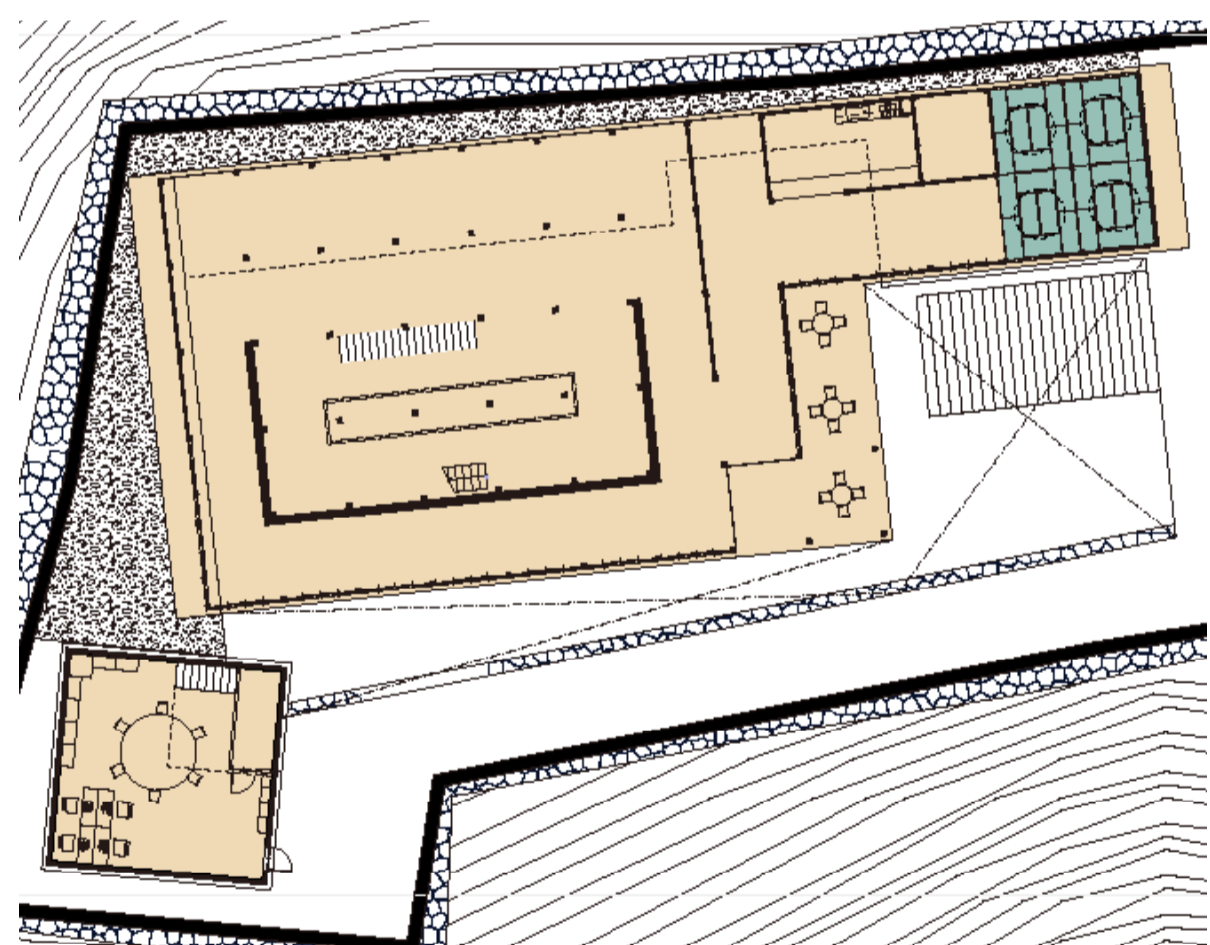
平面図 (1/300)



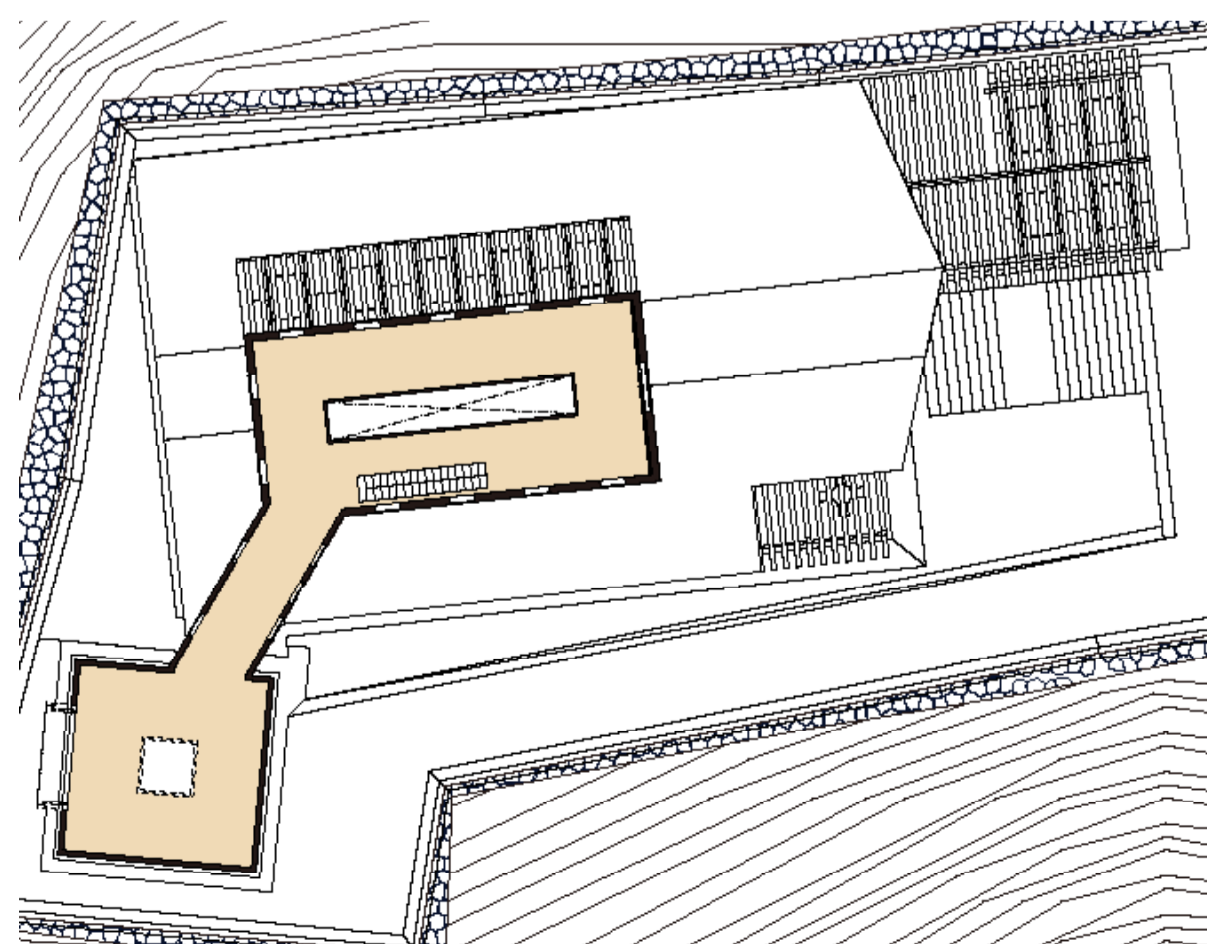
屋根伏図



地下一階



地上一階



地上二階

